



「人としての育ち」に思いを馳せて

図書館長(保育科教授)

山城 真紀子

「団塊の世代」がもてはやされている感がする一方で、「少子化・子育て」問題は大きく取り上げられ、「平成の産めよ・増やせよ」政策は、単に国の活力や、経済問題の視点からでなく、次世代を担う子ども達の教育にも大きな影響を投げかけてきています。少子化になると、一人あたりの教育費が多くなり、その恩恵で子どもが豊かに育つということではないようです。子育ては誰もができると考えられていた時代から、子どもとの関わり方を知らないなど、育児不安を抱える親が増え、社会でサポートすることが模索されています。子ども達の発達保障や親の就労支援だけでなく、親育て支援までもが保育者に求められています。第1子の「できちゃた婚」は42.2%で沖縄県は全国一です。その8割が十代で占めており、学生たちは夜型社会が原因ではないかと分析しています。他の国でも低年齢化していく出産現象に、児童福祉政策の関係者はライフスタイルや価値観の多様化している現代社会で、偏見を持つことなく、本人が十代でやりたいこと、学習したいことを育児と共に保障するなど、個別に対応していく必要があります。政策・制度の整備や子育て支援人材の養成が急務であると提言しています。

最近の「サイレントベビー」問題、いわゆる無表情、目と目を合わさない、抱かれることを嫌がる赤ちゃんの出現等、子ども達のこころの育ちや、からだの育ちのおかしさの進行が実感されてきており、少子化問題は年金、社会活力だけの問題だけではなく、教育の問題(人としての育ち)として深刻さを増してきています。子ども大人を問わず「人と関わる力」が萎えていることが心配され、コミュニケーション能力の低下が指摘されていますが、なぜ、こんなにも人と関わる力のことが重要視されるのだろうか？ 鯨岡峻氏は「人間の文字は人の間と書くよう、人間は一人では生きられず「共に生きる」動物故に、コミュニケーションは欠くことができない。しかも、コミュニケーション能力の低下が指摘されると、コミュニケーション能力の育成のために「言葉を獲得させる」「自分を表現させる」など「**・**させる」教育的働きかけに目が向きがちであるが、それ以前に、自分のことを理解して欲しい、表現したいという気持ちが育つ必要がある。」と指摘し、「その為には周りにいついかなる時でも信頼できる大人や存在を無視されず応答してくれる大人や友人が必要であり、受容し

共感してくれる人の存在がコミュニケーション能力を高めてくれる」と述べている。

一人の人間として尊重され、育まれていくことこそが必要であり、知識偏重意識が強いなかで子ども時代から早く良い子になることや、早く賢い子になることが期待され、大人が良いと思えることを優先に教え込まれ、乳幼児期から親子共々競争を意識させられている。効率・競争を煽られる生活の中で本当の意味で人間らしく育つのだろうか？

図書館の傍らで、ふとそのようなことを考えながら、図書館と利用者の関係に思いを巡らす。本を読まない傾向にマイナスの視点を向けるのではなく、意欲を引き出す機能をもつ図書館でなくてはならないであろうと。



「新時代の図書館とは？」

本学名誉教授・前学長、国際基督教大学名誉教授
原 喜美

図書館報『ソフォス』に書かせていただくことになって、しかも本学院創立50周年を記念するという光栄にめぐまれました。

創設者、仲里朝章先生やKREIDER先生が夢想だになさらなかった時代すなわち高度情報社会の到来に相応しい図書館とは、一体どういうものでありましょうか？

今回、二つのタイプを紹介させていただきます。一つは、国際基督教大学前学長絹川正吉先生のご紹介による、「ミルドレッド・トップ・オスマー図書館」で、他方は、琵琶湖沿いに所在する「自殺したくなったら行きたくなるような図書館」すなわち「能登川図書館」である。

絹川前学長のご紹介による図書館は、高度情報化社会の最先端を行く図書館として注目されている。国際基督教大学に創立50周年を記念して、同大学へ寄贈された故ミルドレッド・トップ・オスマー夫人(Mildred Topp Othmer Library)がコンピュータほかニューメディア機能を装備したライブラリーとして建設がなされた。書架は一切なく、オープンスペースには学習用のパソコン120台を設置、マルチメディアを用いた授業が可能なマルチメディアルーム、グループ学習室、AVキャレルなどスタディエリアを擁している。旧図書館とはブリッジでつながれており、図書・雑誌とデジタルメディアの融合を実現しており、学生たちの学習・研究の中心存在である。

地下にはコンピュータ制御の50万冊の図書を収納するロボットで操作される自動化書庫が設置され、図書館本館の蔵書の増加に対応することになっている。日本の図書館では初めて導入し、高密度で効率のよい出納を可能にしている図書館である。

同大学の前学長絹川正吉先生は「先ずこの図書館の求めるものは、大学教育を単に知識受容型から学習支援型に改革することです。これは日本社会の切に求めるところです。ミルドレッド・トップ・オスマーによる優れた情報管理機能は本学の個性的な情報教育に益、機能を充実させることを確信します。」と述べておられる。又、このAuto Lib. Miniは大中小規模図書館にも適用されており、現在では相当数の大学にもそれぞれ設置されている。

次に「自殺をしたくなったら行く図書館」とは東近江市立「能登川図書館」

で、開館して10年目を向かえる図書館である。旧能登川町の公民館図書館の時には、年間1万冊の利用であったが、現在は年間30万冊である。

年間の自殺者数が8年連続で3万人を突破し、深刻な社会問題になっている時期に、「自殺しなくなったら図書館へ行こう」という言葉が全国に広がるきっかけを作った東近江市立「能登川図書館」は「隠れ場としての図書館」として機能した。本と出会い「命」を考えて、自殺する前の段階で、本や人との出会い、ほっとできる「隠れ場」としての図書館が求められ、「能登川図書館」は、現代社会における図書館の可能性や果たすべき役割を利用者の関心に応える態勢を整えている。

虫賀宗博氏(論楽社代表)の雑誌『世界』に掲載された「私の居場所 自殺しなくなったら、図書館に行こう」という論考は、生き延びることのできる「生命のコーナー」がある図書館で、図書館が地域生活において欠くことのできないプラス価値の要素を与える存在という評価が示されている。あるいは沖縄キリスト教学院図書館のような「地域に生かし、生かされる図書館」である。

図書館は生涯にわたっての「学び」を保障し、人が知りたいことを提供する場。身近にあることが何より重要なのである。さすが図書館は大学の心臓部とは、昔からの名言である。本学の図書館が小さいながら日本一の本ものの図書館の一つとなって、学生たちや地域の人々の勉学に大きな研究の支えとなってほしいと願う。



小説を書きたい学生のための読書案内

人文学部

英語コミュニケーション学科助教授

本浜 秀彦

オキナワ文学の「仕掛け人」の異名をとる本浜です。オキナワ文学は、1879年の「琉球処分」で沖縄が日本に編入された近代以降、現代に至るまで、「ウチナンチュ」だと意識する表現者が、主に沖縄を題材にして書いた小説や詩などの文学作品のことで、私が企画・編集したアンソロジー『**沖縄文学選—日本文学のエッジからの問い**』（勉誠出版）には、沖縄の近現代の代表的な作品が収録されています。私の授業で使っていますが、全国の大学でも教科書、参考書として採用されています。（キリ学の図書館にもありますので、ご一読を。）

さて、その「仕掛け人」が、昨年4月にキリ学に赴任して以来、実は学生にひそかに期待していることがあります。それは、新しい小説の書き手が皆さんの中から登場してくれないだろうか、ということです。

文学はいつの世も若者とともにあります。特に今、各出版社は、若く新しい才能を積極的に求めています。文壇の登竜門である芥川賞のいちばん最近（今年1月）の受賞者も、大学を卒業して間もない23歳、青山七恵でした（受賞作「ひとり日和」）。キリ学の学生の皆さんを見てみると、そのすごい感性がびんびん伝わってきます。あとは、その感性や今の時代や社会への思いをことばにして、自分とほかの人たちのために、どう「物語」を綴れるかがポイントです。小説を書いてみたいと考える学生の参考までに、最近注目を集める作家の、文庫で読める作品を中心に紹介します。

まずは、2004年、大学在学中の19歳のときに、「蹴りたい背中」で芥川賞を最年少で受賞した綿矢りさのデビュー作「インストール」（河出書房新社）。学校嫌いの女子高生が、ゴミ捨て場で知り合った小学生の男の子と押入れの中でコンピュータを使って、インターネット風俗に乗り出すという小説です。彼女たちがチャットを通してのぞいた「オトナの世界」は、今の世相を映し出します。

綿矢と芥川賞を同時に受けた金原ひとみも当時20歳。史上2番目に若い受賞者でした。受賞作「蛇にピアス」（集英社）は、舌に大きなピアスをし（できれば蛇のように、舌の先を二つに割る「スプリットタン」をしたがっている）、背

中に龍と麒麟の刺青を入れるという、少々アブナイ10代後半の女性のお話。生きていることを確かめるため、あるいは人との関係を深めるため、自分の身体を変えたいくなる、傷つけたいくなるという若者の感覚をうまく捉えています。

戦争という重いテーマを、新しい感性で描いた三崎亜記の「となり町戦争」(集英社)。最近映画化もされました。戦争を知らない世代にとって、戦争とは実はよく分からない—その「見えない戦争」を、となり町との戦争というリアルさとファンタジーを交差させて描いた秀作です。この作品と、現在の沖縄における暴力—米軍基地—と社会の歪みを抉った、沖縄で最も注目すべき作家の目取真俊(97年に「水滴」で芥川賞)の「虹の鳥」(影書房)を併せて読んでみるのもいいかもしれません。

とりあえず、ここで紹介した小説のどれかに興味があれば、一気に読んでみてください。読んでみて、どんな感想をもったでしょうか。面白くてはまってしまった。そういう人は、その人の別の作品や、あるいはほかの作家の作品どんどん読むといいでしょう。

えっ、何冊か読んでみたけど、たいしたことない?自分にも書けそう?その反応を待っていました。そう思ったら、とにかく自分で小説を書いてみてください。で、書き始めたら、最後までちゃんと書き切ること。いくら最初や部分的によく書けても、作品を閉じなければだめです。うまく書けたら、誰かに読んでもらってください。もしぼくによければ読みますよ。その後のアドバイスは、作品を読んでからということにします。ほら、何か書いてみたいと思ってきた?でも、そのためにも、まず読まないかね。いい文学作品との出会いを期待しています。

(もとはま ひでひこ・主な担当科目:表象文化論、文化接触論、英語講読演習Ⅲ・Ⅳ、表現技法)

図書館奨学生からのメッセージ

- 英語科2年次 下地 みのり
- 英語コミュニケーション学科3年次 新里 恵梨
- 保育科1年次 呉屋 葵

図書館奨学生の仕事を終えて

英語科2年次 下地 みのり

図書館は、学生生活を豊かにする場所なので図書館奨学生として少しでも関わったことを嬉しく思う。

人や本に出会い、日々、違う人生観や世界観に触れて、どんどん成長することができたと思う。単なる奨学金のことだけではなく図書館で過ごす時間が楽しかった。いつの間にか図書館は、私の大学生活にきっても切り離せない存在になっていた。ある日、友人と帰宅途中、「図書館は？」って聞かれて、おもわず苦笑してしまった。

友人は常に私が図書館にいるイメージが強烈だったらしい。また、図書館業務を通して先生方とも親しくなれた。大学に通う意味は、教授などの姿勢を学ぶところにあると考えるので、これが一番の財産になったと感じている。

今日では、テレビやインターネットなどで必要な情報だけを手軽に入手することもできるが、やはり、一見無駄に見える本の探索こそレポート作成には必要不可欠な事だと思う。レポートのテーマを調べているうちに、新たな情報も入手できて、自己発見にもつながっていったことに感謝している。

最後に、後輩の皆様へ、図書館をいろいろな角度から利用し、本学の建学の精神である「平和を作り出せる者」になってほしい。そのためには、学生の時期にたくさん学び、今しかできない多くのことを経験して学生生活をエンジョイしてほしいと願う。

「出会いの場」

英語コミュニケーション学科3年次 新里 恵梨

小さい頃から本が好きで図書館に通っていた私にとって、図書館奨学生として2カ

年間、本学院図書館で仕事を手伝えることは幸せだった。今もアルバイトをさせて頂く機会に恵まれ、日々たくさんの本に触れることができる。

何十万冊とある本の中には、それぞれ独自の世界が広がっており、図書館にはそれらの世界に触れる機会があふれている。一冊一冊がもつ独自の世界から何を得るのか、そこから何を構築するのか、といったあらゆる可能性が図書館には秘められている。

図書館に秘められているのは、本との出会いの可能性だけではない。そこに集う人との出会いもまた面白い。私には図書館で出会った友人が、短大と四大に学科を問わず増え続けている。彼らの持つ独自の世界に、感心してしまうことがよくある。それはもちろん学生だけではない。教職員の方々との出会いもまた新たな価値観に触れることができ、日々学ぶ環境に恵まれている。

改めて、図書館は出会いの場でもあることを実感する。本と人、人と人とを結びつける。残り1年の学生生活には、どんな出会いが待っているのか楽しみでならない。



「図書館ボランティアを通して」

保育科1年次 呉屋 葵

図書館は好きな場所のひとつです。以前から、ゆったりと落ち着く図書館の中で利用者としてではなく、なにか関わることができればとずっと願っていました。しかし、中学、高校と部活などで忙しくその機会に恵まれませんでした。

大学生になってやっとその機会をいただくことができ感謝しています。この1年間、図書館の閲覧業務に関することを教わり、いろいろなことを経験させていただきました。利用者としてではなく図書館に関わる側にたってみて、はじめて職員の方々の大変さを知りました。

私は主にカウンターで本や資料の貸し出しをしたり、破れた本の修理をしたりしました。そんな中で、タバコの臭いの染み付いた本に触れることもあり、思いやる気持ちをもって本に接してほしいとすごく感じました。

これから2年次になって保育所、幼稚園実習等があるので、絵本や保育の専門書などに利用者としても図書館と関わることが多くなると思います。特に、保育士を目指している私にとって、絵本は幼い子どもたちに接するためのひとつの方法です。日頃から図書館を活用して、日本の昔話やおとぎ話など様々な本の世界に触れ、子どもたちに夢を伝えていけるようにしたいと考えています。

書館委員からの一言

- 総合教育系特任教授 渡久地 政順
- 人文学部英語コミュニケーション学科教授 伊佐 雅子
- 英語科教授 作田 真由子
- 保育科講師 大城 りえ



若い時に名作を読む



総合教育系特任教授
渡久地 政順

1959年、私は琉球大学の英文科を卒業した。学生時代は英語の勉強に明け暮れた。当時を回想して今一番の悔恨の念は、日本文学を殆ど読まなかったことである。英語さえできればよいと考えていたのが最大の誤りであった。

四年余の米国留学中、私はしばしば日本人としての自己アイデンティティに悩んだ。日本人であるとはどういうことなのか、という疑問や悩みであった。勿論、今でもその疑問や悩みが払拭されたわけではないが。

半世紀近くの教師生活にもそろそろ終止符を打つ時が来た。今、私が若い学生の皆さんに伝えたいことは、「若い時こそ名作を読め」ということである。特に日本の古代および近代の名作を読むことである。源氏物語や徒然草や枕草子などの古代文学の名作、森鷗外や夏目漱石や芥川龍之介の近代文学の名作である。これらの名作を読むことによって、日本人の死生観、自然に対する繊細で審美的な感受性と畏怖感、人に対する思いやりの心、わびやさびの心情、等が育つのだと思う。

専門が英語であれ、保育であれ、若い今の時期に、日本の名作を読むことは何よりも価値あることだと思う。真の国際人、真の保育者はそこから育つのだと確信する。



木と森をみよう



人文学部英語コミュニケーション学科教授

伊佐 雅子

最近は異文化論が盛んである。R.ニスベット氏の『木を見る西洋人、森を見る東洋人』はお薦めの本です。この本は東洋人と西洋人の心や思考のかたちが文化によっていかに違うのか、その違いはなぜ生じるのかを科学的に解明している。東洋人のものの見方や考え方は「包括的」であり、西洋人のそれは「分析的」であるという。面白いのは、両者の思考の違いを説明するのに、アリストテレスと孔子を産んだ社会を取り上げているところです。ギリシャは世界の交易の中心に位置し、目新しく不可解な人や風習の信念を目の当たりし、人々は矛盾を処理する必要に迫られ、論理規則によって出来事を理解する形式論理学が発達した。一方、中国は約95%が同じ漢民族であるため、調和を保つことや共有する行動規範に従うことを重視する。従って、意見に相違がある場合、東洋人は「中庸」を求めるが、西洋人は一方の信念が他方よりも正しいことにこだわるという。この本から、我々はステレオタイプで他者をみてはいけないこと、また、ものの見方や考え方は一つではないことがわかります。本を読むことで、異文化理解を深めましょう。



心の食べ物



英語科教授
作田 真由子

ギリシャの詩人、ホメーロス(紀元前9-8世紀ごろ)の叙事詩『イーリアス』。ここに描かれた、ギリシャ、トロイ両陣営の戦士たちには、それぞれ彼らをひいきにしている神々がいて、けしかけたり励ましたり、あるいは忠告をしたりしています。果ては神である身で戦に介入し、敵の戦士の目をくらませたり、武具を剥ぎ取ったりさえします。高校生ごろ、私は息を飲んでむさぼるように読んでいました。なぜあんなに興奮したのか、振り返ってみると、どうもこの宇宙に満ちている生命の波動のようなもの—それは雄大で無限で不滅なものですが—と、有限で必滅の存在である人間のつながり、といったものを感じていたような気がします。自然の勢力(ここでは神と呼ばれていますが)は人間の内部にもあって、それが一緒に揺れ動いている、共鳴している、ということをこの偉大な詩人の筆が描き出しているように思えたのです。本というものは不思議なものです。今では滅多にひも解きませんが、『イーリアス』を読んだこの感覚は私の心の財産になっています。



すてきな本との出会いを

保育科講師

大城 りえ

皆さんは、今までの人生の中でどのような本に出会われてきたのでしょうか？私が出会った本の中で最も思い出深い作品は、灰谷健次郎の「兎の眼」(角川文庫)です。大学生の時に、初めて読んだ灰谷作品でした。「子どもとは」「教師とは」「人間とは」そして「生きるとは」ということを考えさせられ、非常に感銘を受けました。教員を目指していた私は、涙を流しながら何度も読み返した思い出があります。その後、大学院生時代、目標だった教員になってからも灰谷作品を読み続けています。作品に描かれている登場人物たちの生き方は、私の心にまっすぐ様々な問いを投げかけてくれます。また、教員をしていく上で、原点になってくれているように感じます。折に触れ、私の心をよぎり、「教員としての自分」を見つめさせてくれています。皆さんもぜひ人生の中で大切な本、あなたの人間性と人生を豊かにしてくれる本に出会ってほしいと願います。



❖ レポートや論文作成を楽しみながら、強い味方になる情報検索をご紹介します。❖

ホームページの学内蔵書検索から、Webcat Plusへの横断検索ができるようになりました。

探している本が図書館にあるかどうかを調べるには、図書館のホームページから「OPAC(蔵書検索)」をクリック。ここまでは、みなさんやったことがあると思います。

では、その画面から引き続き、Webcat Plusの検索ができることをご存知ですか。

❖ Webcat Plusでどんな本があるかを探す ❖

あるテーマについて、「どんな」本があるのか探したいときにお勧めの無料のデータベースです。全国の大学図書館等の図書・雑誌を検索できます。探したい図書の情報をできるだけ効果的に見つけるために、二つの検索機能を効果的に結び付けています。論文執筆にある必要な図書を探したいとき、関心のあるテーマで図書を探したいとき、タイトルは思い出せないが著者名がわかるとき...など、Webcat Plusは、いろいろな場合に応じて適切な図書を簡単に探しだすことができる連想検索ができるのが特徴です。

→ Webcat Plusによる検索の流れ

<http://webcatplus.nii.ac.jp/>

❖ ELNET(イーエルネット) 全国新聞・雑誌記事 紙面データベース (ELDB) ❖

2007年4月より新規に受け入れることになりました。学内の端末から検索できます。

主な特徴

☆国内最大級の新聞・雑誌記事データベース

1988年以降、約1,300万件の記事を収録しています。記事情報は毎日蓄積されています。

☆新聞70誌・雑誌約150誌から一括横断検索

全国紙・地方紙・業界紙を含む新聞68誌、雑誌約150誌の記事情報が一括で横断検索できます。

☆記事原文データをイメージで提供

検索結果は、記事見出し一覧と、記事原文イメージ(見出し、写真、図表等が入った切抜き状態)として閲覧できます。

☆記事原文イメージをパソコン画面表示

記事原文イメージは、パソコン画面上に表示してプリンタ出力できます。

ELNET <http://www.elnet.co.jp>



図書館利用者からよくいただく質問です。資料を探すときの参考にしてください。

Q OPACで検索し、請求記号どおり探しましたが見当たりません。

次のことをチェックしてください。

A 貸し出し中ではありませんか？OPACでは「鉛筆マーク」でわかります。

貸し出し中の場合は予約ができます。

A 館内で閲覧中かも知れません。
時間を見て、もう一度書架をご覧ください。

A 配架場所はありますか。
図書は一般図書の配置以外にいくつかの配置特色があります。次の資料はそれぞれの配架場所があります。

- 参考図書
- 文庫本
- 郷土資料
- 児童図書
- キリスト教関連の図書
- 特別コレクション
- 洋書

A 利用頻度の少ない本で閉架書庫かもしれません。
カウンターで申し込んでください。

A 正しい位置に戻されていないかもしれません。
上下、左右の段を探してみてください。それでも見つからない場合はカウンターで聞いてみてください。

A 研究図書かもしれません。
この場合は問い合わせてください。

Q 備えられている印刷新聞の他に国内の新聞を図書館で読めますか。

A 学内のコンピュータから『聞蔵』を通して朝日新聞やAERAなどにアクセスできます。

A 今年4月から『EL-NET』を通して全国の新聞にオンライン・アクセスができます。

Q 必要な資料がない場合、どうしたらいいでしょうか。

A 図書館を通して県内の大学図書館や全国の大学図書館から資料が借りることができます(相互貸借)。また、文献複写も取り寄せることができます。

A カウンターでお聞きください。

図書館のホームページや『図書館利用案内』を参考にしてください

人事〈図書館〉

〈館長〉任期満了(2005年4月1日～2007年3月31日)

館長 山城 真紀子(保育科教授)

〈次期館長〉(任期:2007年4月1日～2009年3月31日)

英語コミュニケーション学科教授 大城 宜武

〈図書館委員〉任期満了(2005年4月1日～2007年3月31日)

英語コミュニケーション学科教授 伊佐 雅子

総合教育系教授 渡久地 政順

英語科教授 作田 真由子

保育科講師 大城 りえ

〈事務職員〉退職

図書館図書課主任 出盛 多千夫(2006年12月31日付)

〈異動〉(2006年9月1日付)

図書課図書課長(学生部学生課長) 宮元 和子

卒業後の図書館利用について

本学院図書館は、本学の学生、教職員に限らず、卒業生、公開講座受講生、一般及び地域住民の方々にも開放しております。文献複写やその他のサービスも提供し、生涯学習活動を支援しています。卒業後は、「学外者図書館利用申請書」で申請し、「学外者閲覧許可証」の発行をもって本の貸借ができます。

貸出冊数は2冊までとし、10日間の貸出サービスが受けられます。

“卒業後も引き続き、本図書館をどうぞご利用ください。”

編 集 後 記

今号は、図書館利用について特集してみました。文献探索を自由自在にこなし、仕掛け人の罠にはまれば、近いうちに「若い作家の誕生」かも…。と“楽しい夢”も現実に…。！！

図書館長や図書館委員の先生方が今年度で任期満了となります。これまでのご功績やご尽力に心から感謝申し上げます。また、これまで30年余に渡ってこの学院で共に働かれた退職者の皆様にも敬意を表します。

今号に遠隔地よりご寄稿戴きました前学長、ご協力いただきました皆様方に深く感謝申し上げます。（宮元）